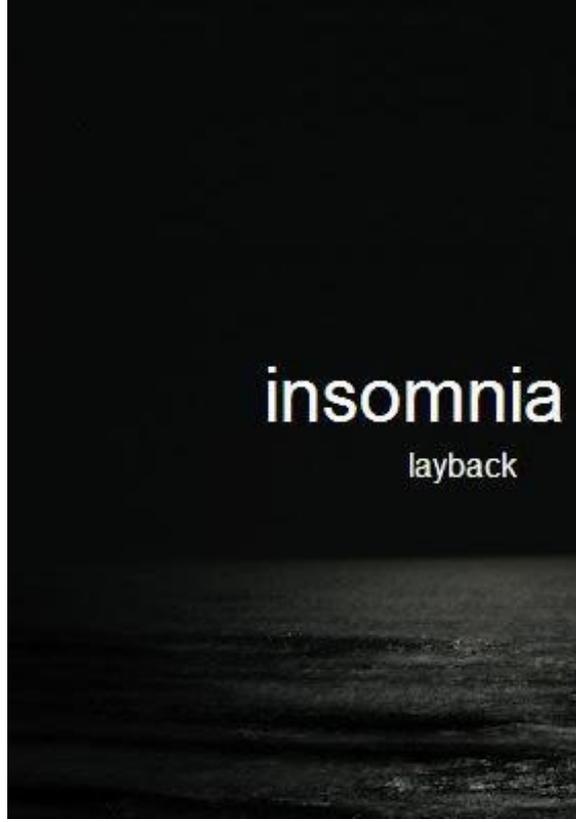


insomnia

layback



ことばの海

ことばの海なら浮き輪はいらない。大きく息を吸って飛び込んだ。鰯の大群が泳いでいる。弱い魚という字面とは裏腹に陽の光をぎらぎらと跳ね返すそのダンスはとても力強いものだった。急に影が差す。散り散りになる鰯の群れ。その真ん中を特大フォントの鯨が悠々と通り過ぎていった。

ネズミ

中の人などいない。ネズミは言う。君は着ぐるみだろう？ 違う。ネズミは断固として譲らない。おそらく野生化する前に飼われていた娯楽施設で洗脳されたのだろう。あなたはネズミです。中の人などいません。そんな風に。そして着ぐるみを脱ぐことも忘れてしまった。可哀想なネズミ。

ねこの雨

空からねこが降ってきた。にゃんぱらりにゃんぱらりと身を翻して着地するねこ達に見とれていると一匹が失敗してどーんと背中から落ちた。慌ててかけ寄る。でぶねこだ。ぴくぴくと痙攣している。だ、大丈夫？ よろめきながら起き上がったその子は、にゃあと鳴いてうちの子になった。

レンタル彼氏

レンタル彼氏を借りてきた。2泊3日で5万円。今週ずっと働きづめだった自分へのご褒美だと思えば決して高くはない。だが楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。返したくないな。僕だって帰りたくないさ。レンタル彼氏は悲しげな目で言う。嘘つき。延滞料金が目当てなんでしょ？

紙魚

読みかけの文庫本を開くと紙魚が泳いでいた。気持ちよさそうにすいすいと行間をすり抜けてはルビを食べてゆく。べつにルビなど無くとも困ることはない。そのまま放っておいた。紙魚はくるりと反転してこちらを向く。口からぷくぷくと泡ならぬルビを吐き出した。コノホンツマラナイ。

シャッター

閉店後のパン屋の前に人だかりができています。店の主人がシャッターを下ろしはじめた。ざわついていた群衆が急にしんと静まり返る。月明かりに浮かび上がったのは恐竜の絵。群衆はため息を洩らす。そのため息が霧を呼び、霧の彼方から雄叫びが聞こえてくる。白亜紀への扉が開かれた。

小さなおっさん

小さなおっさんがカブト虫のように西瓜にかぶりついている。塩はいいの？ おっさんは怪訝な顔をする。構わず上から塩を振る。こらっ、わしにかかるとるやないか。あのな、西瓜に塩なんか振るもんはあほや。にくたらしい。ぷっと飛ばした種がおっさんの禿げ散らかした頭に当たった。

大なめくじ

廊下がぬらぬらと光っている。大なめくじが帰ってきたのだ。母の寝室のドアが開いている。ぴちゃぴちゃと粘液が絡む音。おれは見てしまう。母はあられもない姿で大なめくじを受け入れている。蝶番が軋む。大なめくじの目が潜望鏡のように回転する。おれは声にならない悲鳴を上げる。

間違い電話

「パパ？」間違い電話だった。僕に子供はいない。なのに相手は切ろうとしない。「はじめて繋がったのに。それが間違いだなんて」「僕にそう言われても」「母に渡されたんです。これがあなたの父親の連絡先よ、と」「君のお母さんの名前は？」彼女が口にしたのは僕の恋人の名だった。

羊を数える

蒸し暑くて眠れない。羊を数えることにした。ところが当の羊の姿が暑苦しい。彼らの顔も真っ赤だ。毛を刈るか？ そう訊くと、こくりと頷く。早速バリカンを用意した。一匹、二匹、みるみる間に羊たちはスリムになってスキップしはじめる。良かったね。これで真夏の夜も眠れるね。

指

君は綺麗な指をしているね。何度も何度も愛撫される。彼は寝てしまった。何か飲み物かと思
い冷蔵庫を開けるとソーセージの袋が目に入る。違う。銘柄のない袋にはぎっしりと指が入って
いた。見たね。振り返ると彼が立っている。どれもこれも綺麗な指だろう？ 君ほどではないけ
どね。

視線

窓ぎわの席に座っている男は、左手に本を開きながら、ちらちらと隣の席の女を見ている。そのくせ私の視線には気づきもしない。窓ぎわの席に座っている男は、左手に本を開きながら、ちらちらと隣の席の女を見ている。そのくせ私の視線には気づきもしない。また同じ箇所を読んでいた。

渴いた犬

犬は渴いていた。歩き疲れてもいた。旅行だと思った。それ以外ではクルマに寄せられることなどなかったからだ。見ず知らずの土地で降ろされた。クルマは後輪を空転させ、砂埃を巻き上げて走り去っていった。犬は何度も叫んだ。声が嘎れるまで叫んだ。犬の名は二度と呼ばれなかった。

卵

水に浮かない卵はだめだから。声が聞こえる。水面を破る音。どうやらぼくはだめだったようだ。どんどん沈んでゆく。なにかに当たって殻が割れる。まだなにものでもないぼくはあっという間に溶けだして集まってきたサカナやカメに飲まれる。こうしてぼくはようやくなにかになる。

サメのジョー

サメのジョーは水没したデパートに住んでいる。縄張りは2階ヤングレディースファッションフロアだ。ジョーは雄だが婦人服が大好きだった。ズボンが穿けない彼に紳士服は馴染まない。今日ジョーが着ているのは夏物のワンピース。すそが海草のようにゆらめいてなんともかわいいのだ。

ダイエット

夫はわたしの顔を見るたびに痩せろと言う。おはよう。痩せろ。行ってらっしゃい。痩せろ。お帰りなさい。痩せろ。必死にダイエットをした。少しずつではあったが着実に体重は減っていった。それでも夫の言葉は止まない。痩せろ。ついにわたしは骨になる。あなた好みになれたかしら？

焼きもち屋

焼きもち屋をはじめた。焼きもちという気持ちはなんとも嫌なものだ。私はそれを餅に閉じ込めて焼いてしまう。すると客の嫉妬心はきれいに消えてなくなる。先日は娘に頼まれて餅を焼いた。今は彼氏とうまくいっているようだ。「あなた、お客さんもないのに、なぜ餅を焼いているの？」

納豆かき混ぜ士

納豆かき混ぜ士を呼んだ。無性に納豆が食べたかった。だが自分で納豆をかき混ぜる気力は残ってはいなかった。お疲れのご様子ですね。納豆かき混ぜ士は優雅な手つきで納豆をかき混ぜる。あたしもかき混ぜて。思わず言いそうになる。彼の細い指の下で納豆はいやらしい糸を引いていた。

フライドポテト

フライドポテトは呼び出される。肉の高騰でパーティが足りない。今日からお前がパーティ役をやれ。芋なのに？ いやならクビでもいいんだぞ。フライドポテトはバンズに抱かれる。萎れた姿がなんとも情けない。それを見て監督も嘆息する。お前にゃ無理だ。フライドポテトは店を飛び出す。

小さな山羊

郵便受けの中に小さな山羊が住みついていた。だからパパからの手紙が僕の許に届かないのだ。小さな山羊は目に見えないから捕まえることもできない。郵便配達夫のマルコさんにパパからの手紙は直接僕に手渡してと頼んでも彼は悲しげな顔をして肩をすくめるだけ。ねえママ、どうして？

麒麟と向日葵

首の骨を折った麒麟は向日葵の莖で添え木する。すくすくと向日葵は成長し、それにつれ麒麟の首も伸びてゆく。いつしか麒麟は雲の上に立っていた。ここでお別れだよ。向日葵はいう。さよならなんて嫌だ。麒麟が泣き出したのを見て向日葵は笑う。また逢えるさ。夏が終われば。

隙間花火

いつまで寝てるん。はじまってしまうよ。肩を揺り動かしても、父は、うん、わかった、と唸るだけ。お酒の匂いが浴衣につかないように少し離れる。外でどーんと音がする。五歳のわたしはいてもたってもいられなくて窓を開ける。家々の隙間から半月のように切り取られた花火が見える。

小さな花火

父は魔法使いだった。どこからともなくこよりのようなものを出してきて、工場でシゲさんにもろたんや。せやけどしけってるかもしれんな。しけってる？ しけってるってなに？ まあ見とき。表で火をつけた。父の指先には花火がぶらさがっていた。小さな花火。はじめて見る線香花火。

ロケット花火

ロケット花火はロケット鉛筆に恋をする。よく見てて。ロケット花火はそう言って飛び立った。ロケット鉛筆は芯をすり減らして彼の無事を祈る。夜空に光の文字が描き出された。Marry Me
燃え尽きたロケット花火が落ちてくる。地上ではすでに星の数ほど Yes が書かれていた。

沢蟹の親子

沢蟹の親子は川底で寄り添っていました。どおんどおんと大きな音が岩陰まで響いてきます。「お父さん怖いよ」「岩の上から見てみようか」「だめだよ。爆弾だよ。危ないよ」「大丈夫さ。あれは怖くないほうの爆弾だから」この日、子蟹は生まれて初めて花火というものを目にしました。

欠片

河川敷で乞食の男が何かを拾い集めている。何を拾っているの？ 野良犬は尋ねる。砕けた恋と花火の欠片さ。そんなもの拾ってどうするの？ 花火の欠片は土竜に、砕けた恋は悪魔に売るのがさ。土竜は火薬の匂いが、悪魔は人の不幸が大好きだからね。乞食はそう云うとカラカラと笑った。

報告

今日の試合は四打数三安打だった。パパに報告しなきゃと思って急いで家に帰るとママしかいない。「パパは？」「融けたわ」ぼくは冷凍庫を開ける。一番上の製氷皿にパパの顔のパーツが入っている。「ねえパパ、今日は三本もヒットを打ったよ」紫色の唇がパクパクする。「良くやった」

釘

口の中に釘を含んで唇を直していた。つかつかと妻が近づいてくる。眉間にはマリアナ海溝のように深いしわが寄っていた。「食べたわね」何を言っているのだろう？「私のプリン。食べたんでしょ」首を横に振る間もなく彼女の平手打ちが飛んできた。口の中いっぱい鉄の味が広がった。

ゴーストライター

僕はゴーストライター。恋文の代筆屋。成功率100%だったからとても繁盛していた。ところがいざ自分の恋心となると上手く伝えられず、失恋した僕は自ら死を選んだ。今でも僕の墓前には依頼者がやってくる。彼女は墓参りにも来ないのに。嘆いていたら彼女が現れた。「代筆してほしいの」

サメのジョー

サメのジョーは水没したデパートに住んでいる。シマは2階ヤングレディースファッションフロアだ。今日はシフォンのスカートをはいて散歩に出る。ジュエリーコーナーでヒトデのミランダが指輪を試していた。いいね。ジョーは声をかける。照れる彼女の指には大粒の真珠が光っている。

花泥棒

ねずみのような男はぼつりぼつりと話しはじめた。家に花を買うような余裕はありませんでした。隣家の庭に白い花が咲いていました。その花を摘み取って食卓に飾りました。花器などありませんから牛乳の空き瓶にです。夜遅く帰宅した母は喜んでくれました。それが私の最初の盗みです。

ぐっすりと眠っていたはずなのになぜだか視線を感じて瞼を開いた。「起こしちゃった。ごめんなさい」月明かりがその女の子の顔を照らしていた。知らない子だった。「寝顔がきれいだったから、つい」「どうやって入ったの?」「ここに住んでるのよ。あなたが越してくる前からずっと」

膝枕

いつもより枕が高くなっているような気がして目が覚めた。「起こしちゃった。ごめんなさい」冷たい指が頬に触れる。彼女の澄んだ瞳が僕を覗き込んでいる。膝枕されていた。「また君か」「一度してみたかったの。幽霊の膝枕は迷惑？」無邪気に首を傾げられると何も言えなかった。

白ねこ

散歩に出る。よく晴れた夜なのに月の姿が見えない。きれいな毛並みの白ねこが足もとにまとわりついてきた。しゃがんでおでこをなでてやるとルルルルとのどを鳴らす。満足したようだ。ひとつ欠伸をした白ねこはしなやかな身のこなしで星の梯子を駆け上がり、夜の真ん中で丸くなった。

かわいい

テレビに映ったパンダの親子を見てつい、かわいいと口にしてしまう。お前に言わせると何でもかわいいだな。夫は鼻で嘲笑う。いつもの倍、塩をかけた。「いただきます」「味はどう？」「美味しいよ」夫は何を食べても美味しいと言う。「良かった」それだけがあなたの取り柄なものね。

無人島

一時間かけて島を一周した。人どころか動物や鳥の姿すら見当たらない。碧色の海では泡が弾けていた。突然足元がずるりと崩れた。転んだ拍子に口の中に砂が入る。甘い。やっと気がついた。ここはメロンソーダ海に浮かぶアイスクリーム島。空を仰ぐとゴリアテのスプーンが落ちてきた。

喪失

喪失というのはつらいものだ。深いかなしみはいつまでもその者を支配する。失ったものがまだ身中に残っているから痛むのだ。ならばそれを取り除けばいい。私は何かを失うたびに身に穴を開けた。今では身体中穴だらけである。もはや失うものは何もない。私は拳銃をこめかみに当てた。

バラバラ

恋人がバラバラになってしまった。何が起こったのだろう。まったく何も思い出せない。突然彼女の頭部が口を開いた。ねえ。早く元に戻してよ。おれはパーツを繋げはじめた。ちゃんと元通りにしてよね。彼女は口を尖らせる。大丈夫さ。おまえの身体のおれがいちばん分かってる。

男が丸めた雑誌を振りかざした瞬間声がした。家で病気の妻と腹を空かせた子供たちが私の帰りを待っている。どうか見逃してもらえないだろうか。蠅が手をすり合わせて懇願していた。とっと行け。男は窓から飛び去ってゆく蠅の後ろ姿を見ながら故郷に残してきた妻子のことを考えた。

うたたね

裏庭にうたたねをまいた。すぐに芽が出てくる。ハート形の芽はレム睡眠とノンレム睡眠を交互に繰り返しながらすやすやと背を伸ばしてゆく。花が咲いた。しおれて、新たなうたたねが実った。ぼくはそれを麻袋に詰める。穫れたてのうたたねは効果抜群。ぼくたち睡魔の必須アイテムだ。

骸骨

骸骨は肉をくれと言った。肉屋は訝しむ。あんたが食べるのかい？ いや。食べるのではない。身に着けるんだ。肉屋は呆れ顔で言う。あいにく人の肉は置いてないよ。骸骨は言う。豚でも羊でもいい。それらしく見えたらいいんだ。肉屋は骸骨を見つめる。お前さん、人の女に惚れたのか？

箆笥

部屋には箆笥がひとつだけ置かれていた。こつりこつりと中から音がする。立ち上がり一番上の抽斗を開けた。白猫がにゃあと鳴いて顔を出した。猫は苦手だ。すぐに閉めた。二段目には黒猫が、三段目には茶トラが入っていた。やはり閉めた。最後に四段目を開けた。三毛猫が死んでいた。

変装

口髭の端をつまんで彼の顔を剥がした。細面の若者が現れる。彼は変装の名人だった。誰も彼の素顔を知らない。恋人の私でさえも。スリルはある。飽きることもない。でも不安だった。私、あなたの本当の顔が見たいわ。それはお互い様さ。彼は私の頬に触れると泣き顔をそっと剥がした。

尺玉

打ち上げ花火の音が下腹に響く。会場は混み合っていてまるで身動きが取れない。もう限界だった。目の前に火花が散った。パンツの中で尺玉が炸裂した。生暖かいものが足を伝って地球を汚した。隣を見た。彼女の横顔は美しかった。だが夜空に開いた大輪の花は涙のせいで見えなかった。

借り物のビーチパラソルの下で寝そべっていると声をかけられた。お姉さん独り？ 良かったら一緒に遊ぼうよ。日に焼けた男の子二人組。どう見ても高校生くらいにしか見えない。ごめんね。連れがいるの。お腹のタオルをめくる。小さなおっさんの禿げ散らかした頭が太陽を跳ね返した。

サメのジョー

サメのジョーは水没したデパートに住んでいる。シマは2階ヤングレディースファッションフロアだ。今日は水色のチュニックを着て散歩に出た。表でナガスクジラのホレスに声をかけられる。いい服だね。ありがとう。ぼくに合う服もあるかな？ ジョーは首を振る。サイズの厳しいね。

うちの幽霊

夜中に目が覚めた。また起こしちゃった。うちに住みついている幽霊はぺろりと舌を出す。迷惑？ いいんだけど、もう少し早い時間に出てきてくれないかな。無理。こんどはつんと横を向く。あなたが遅くまで起きていたらいいのよ。明日仕事だからさ。あたしと仕事とどっちが大事なの？

蝉

嗚呼、蝉になりたい。歌いたいだけ歌を歌って文字通り夏を謳歌して後腐れなくぽっくり逝けたらいいのに。そんなことを考えながら寝て起きたら蝉の幼虫になっていた。辺りは真っ暗。つまり地中。この先いったい何年ここで過ごすのだろうか？ 気が遠くなる。とりあえず寝ることにした。

おもちゃ

二段ベッドからすーすーと気持ちよさそうな寝息が聞こえてきた。木箱の中でいくつもの目が光る。おもちゃの時間だ。ぬいぐるみやロボット、ミニカーたちが動き出す。静かに。くまさんが指を口に当てた。パパとママの寝室から喘ぎ声が聞こえてくる。大人のおもちゃも目覚めたようだ。

サーカス

サーカスを観たい。だが金がない。少年はテントの側で泣いていた。どうしたの。通りかかったピエロが首を傾げる。お金がないの。ピエロはポケットからお手玉を取り出した。一つ二つ三つ。両手の間で玉がアーチを描く。四つ五つ六つ。七つ目の玉が加わって少年の目の前に虹が現れた。

蒸しパン

蒸し暑い夜だった。妻は先に寝た。私もいつのまにか寝ていたようだ。目が覚めると隣で妻が蒸しパンになっていた。しかも二つ。ふっくらとした生地の上に小さなレーズンが載っている。思わずむしゃぶりついてしまった。痛いっ。頬を張られて目が覚めた。妻の乳房に歯型が付いていた。

小さなおっさん

小さなおっさんはわたしの肩にちょこんと座っている。端布で仕立てた浴衣がよく似合っていた。きれいね。花火に見とれていると突然頬に無精ひげと唇の感触が。おっさんは澄ました顔で夜空を見上げている。おっさん。なんや。今キスした？ さあ。禿げ散らかした頭が赤くなっていた。

古井戸

古井戸に降りた。水はくるぶしまでしかない。ひざを抱えて座るとひんやりとして気持ちがいい。もう外の音は何も聞こえない。怒鳴り声も喘ぎ声も。蛙が出てきた。夜なのにいいの？ パパやママが心配するよ。心配なんてしやしないさ。丸い夜空を見上げると星がきらきらと瞬いていた。

象男

象男があらわれた。自然と身体が固まってしまう。象男は長い鼻を伸ばしてわたしの口を塞ぐ。これはキス？ 鼻と口だからたぶんキスじゃない。ファーストキスの相手が象男だなんて誰にも言えない。象男はわたしの身体を弄りはじめる。早く終われ。早く終われ。わたしは呪文を唱える。

文字たち

縁日で掬ってきた文字をプールに放した。家ではこれ以上文字を飼うことはできない。母親にそう言われたからだ。学校のプールなら水泳部の練習の時に世話をすることができる。月明かりと夜風が水面に罫線を引く。文字たちは隊列を組んでは散開、組んでは散開し、物語を紡ぎはじめた。

小さなおっさん

小さなおっさんが起き出してきた。おはよう。うん。心なしかきょうのおっさんは動きがぎこちない。まるで油の切れた機械みたいに。忘れかけていた疑問が浮かぶ。おっさん。なんや。あなた、もしかしてロボットなの？ おっさんは身体ごと振り向いた。困り顔で言う。寝違えたんや。

暗闇

暗闇の中、黒い馬が駆けていた。その背にしがみついた少年はあまりの恐怖に目をつむる。手をはなせ。楽になるぞ。耳元で風がささやきかけてくる。少年は迷う。迷ったすえ手綱をはなした。たちまち後ろに吹き飛ばされる。少年は闇に吞まれ、気がつくとき走る馬の背にしがみついていた。

ヘルベチカ

いきなさい。ヘルベチカはいう。だが子犬たちは彼女にすり寄って離れようとしな。ヘルベチカは我が子に咬みついた。咬まれた子犬は悲鳴を上げる。それを見て他の子犬たちも後ずさりする。再びヘルベチカはいう。いきなさい。子犬たちは街に散った。なんども後ろを振り返りながら。

羊を数えるラジオ

「ひたすら羊を数えるラジオ」という新番組を聴いていた。「羊が一匹。羊が二匹。羊が三匹。では一曲目を聴いてもらいましょう」羊を数えるだけではないのか？ リスナーの疑問など置いてけぼりにして曲が流れる。田舎臭いロックだ。「只今の曲は4Sheepの『羊が五匹』でした」

ロボット

最初に出ていったのは掃除ロボットだった。注文の多い主人に愛想を尽かしたのかもしれない。次に出ていったのは猫ロボットだった。偏屈な主人に愛想を尽かしたのかもしれない。最後に出ていったのは妻ロボットだった。型の古い主人口ロボットである私に愛想を尽かしたのかもしれない。

影

打者は空振りしたが、打者の影は白球の影をレフトスタンドに叩き込んでいた。観衆の影がいっせいに湧き上がる。捕手の影がタイムを取ってマウンドに駆けてゆく。投手の影は帽子を脱いで額の汗を拭った。青空を仰ぐと太陽が囁いた。最後の夏だぞ。分かってます。投手の影は微笑んだ。

大きな影

大きな影が欲しいわ。女はいう。男は駆けずり回って影を集めてくる。ゾウの影。キリンの影。小さいわね。大木の影。巨石の影。まだまだ小さいわ。男は夕陽を背負って帰ってくる。見つからなかったのね。男はにやりと笑う。地平線に陽が沈み、二人はこの星で一番大きな影に包まれた。

道化

道化は王子のお守りを任される。これが面倒で仕方がない。ガキの相手なんかやってられるか。だが王にそう言うわけにもいかない。道化は窓辺でため息をつく。ねえ遊ぼうよ。うるせえ。ねえねえ。ひとりで遊んでろ。道化はすり寄る王子に鼻くそをつける。王子は玉子になって転がった。

大丈夫

人ごみの中で二人。同級生の目を盗んで歩いた。浴衣姿の彼女は俯きながら足を引きずり、時折顔をしかめる。なのに、大丈夫？ と訊くと、大丈夫。と答える。本当は足が痛いのだと思う。だが座り込める場所は見当たらない。大丈夫？ 大丈夫。僕らはただ不器用なやりとりをくり返す。

餌

「そろそろ帰らなきゃ」その一言でピンとくる。「猫の餌やり？」彼女の顔色が変わる。「餌なんて言わないで。家族の一員なんだから」「ごめんなさい。ご飯ね」彼女の携帯電話が鳴った。通話を終えた彼女はため息をつく。「どうしたの？」「旦那が早く帰るって。餌の用意をしなければ」

小さなおっさん

小さなおっさんは野球中継を観ている。あんな玉遊びのなにが面白いのだろう。自分がやるわけでもなく観るだけだなんて。不思議でしょうがなかった。ねえおっさん。なんや。それ面白いの？ なにがや。野球。おもしろいに決まっとるがな。そのわりには冴えない顔ね。負けとるからや.....

3ゲットロボ

3ゲットロボは3を取るために生まれてきたのにちっとも3を取れない。ロボは博士のもとを訪れる。もう死にたいです。そんなことを言うもんじゃない。博士は彼を勇気づけようとして白衣のポケットから3を取り出す。ところがロボは首を横に振る。ぼくが欲しいのは野生の3なんです。

蝶番

蝶番が飛んだ。蝶番はきこきこと体をきしませながら懸命に羽ばたいた。やがて憧れのお花畑が見えてきた。蝶番は舞い降りた。花の蜜を吸うと嘘のように甘くて美味しかった。体が急に軽くなったような気がした。蝶番は花びらの上の水滴に映る自分を見て驚いた。本物の蝶になっていた。

小さなおっさん

予期せぬ残業でくたくたになって帰宅した。ドアを開けると小さなおっさんが上がり框に腰かけていて、おかえり。と迎えてくれる。禿げ散らかした頭がかわいい。焼きプリン買ってきたよ。ほんまか！ おっさんの顔がパッと輝いて思わず笑ってしまう。疲れが吹き飛んだような気がした。

ゼリー

海から上がってきたものはゼリー状の体をくねらせながら町へと向かってゆく。保安官が散弾銃を発砲した。スラグ弾を受けた化け物は飛び散る。ところが生臭い破片は土の上で蠢き再び結合した。犬が呑まれた。死のダンスを踊りながら犬の体は溶けてゆく。やがてゼリーは赤く染まった。

おいしい

むすめが野菜を食べようとしなない。ためしにすり下ろして与えてみるとよろこんで食べた。おいしい？ おいしい。そう満足そうにうなずいてもっととせがむ。夫の夕食が目に入った。今日も帰りは遅いだろう。どうせ食べないのだ。皿のものをフードプロセッサーに片っ端から放り込んだ。

人魚

金魚掬いの水槽の中に一匹だけ人魚が混じっていて目が合ってしまう。自然と手が動いていた。人魚は自らポイの上に横たわる。掬い上げた途端に紙は破れた。けっきょく収穫は人魚一匹。ため息が出る。どこからか声がした。袋の中の人魚がぷくぷくと泡を吐いている。「落ち込まないでよねっ！」

小さなおっさん

「ええかげんエアコンつけへんか」小さなおっさんがいう。「だめよ。節約節約。扇風機があるから我慢できるでしょ。それよりお昼ごはんはどうする？」「素麺でええよ」やる気のない返事。「素麺で。とはどういうこと？ 素麺が。でしょ」そういうとおっさんは怒って外に出た。

小さなおっさん

ドアを開けるといつもの郵便屋さんが立っていた。「これを届けに来ました。ポストに入っていたらしくて」彼の手の上で小さなおっさんがすねている。「どうしたの?」「暑いから避暑地に行こうと思ったんや」おっさんのシャツには軽井沢行きと書かれていた。「バカね。切手も貼らなきゃ」

月

お母さん、こっち来て。と娘がスカートを引っぱる。濡れた手を布巾で拭いて付いていくと、和室の窓から月がきれいに見える。きれいやねえ。と私が云うと、娘も真似をして、きれいやねえ。と云う。今日のお月さまは半分やねえ。半分やねえ。私は白い月を、娘は黒い月を見ている。

蛇口

なぜか部屋の壁に蛇口が付いている。錯覚だろう。疲れているのだ。そう思い目をこする。やはり蛇口が付いている。鈍い光り具合からしてそう真新しいものではない。いかにもずっとここに居ましたと言わんばかりである。思い切ってひねってみた。「たすけて」かすれた声が聞こえてきた。

ダイブ

ビルの屋上からダイブした。と、時間の歩みが止まった。どうやら時速数ミリの速度で落下しているようだ。地面に辿り着くのにどれほどかかるのだろう。そもそもこの速度で落ちて死ぬのか？ ポケットから遺書を取り出して破り捨てた。紙吹雪はいつまでも俺の目の前に浮かんでいた。

黒猫と揚羽

黒猫が空を眺めている。揚羽蝶が飛んでいた。ふらふらとしたその軌跡は金曜の夜の酔っぱらいの足取りを思わせた。やがて揚羽は黒猫の真上に舞い降りてきた。その時、静かに眺めていた黒猫が突然前足を振った。しなやかな鞭のような一撃が蝶の羽を奪った。彼女の夏は永遠に終わった。

海老

年老いた絵描きが鳩を見ながら海老の絵を描いていた。呆けているのだな。可哀想に。通りがかりの男はそう思う。突然、絵描きが振り返った。目を覗き込まれた瞬間、男は絵の中に入り込んでいた。男の体は満足顔の絵描きの筆で塗り換えられてゆく。胎児のように丸く、そして薄紅色に。

小さなおっさん

ようやく小さなおっさんが起き出してきた。禿げ散らかした頭のくせに生意気に寝ぐせがついていてかわいい。おはよ。ふああ、おふあよ。と大あくび。わたしはままごと用のトレイにのせた朝食をおっさんの前に置く。いただきます。おっさんはメロンパンの皮だけをむいて食べはじめた。

寄せては返す波。大きなうねりが訪れて俺が絶頂を迎えそうになると彼女は手を止める。「焦らすなよ」「プログラムですから」曇りのない声が返ってくる。「設定は10回になっています。変更されますか」「今ので何回目だい？」「それは秘密です」機械彼女は太陽のように微笑んだ。

擬似女性器

擬似女性器は蛇腹を波打たせながら夜を駆ける。森に辿り着くころには地平線近くの雲が白みはじめていた。腐葉土に半ば身体を埋めると、やがて桃色の卵が産まれた。木々の隙間から太陽が手を伸ばしてくる。今まさに力尽きようとしている彼女にはそれが祝福の光のように感じられた。

質問

ある作家のサイン会で質問をした。「僕は趣味で小説を書いているけどどうしても気分が乗らない時があります。そんな時先生はどうされますか」「あなたは今お勤めをされていますか」「はい」「では仕事に行きたくないなあという日はどうしますか」「嫌々ながら出勤します」「私も一緒です」

青い月

せっかくの満月なのに空には分厚い雲がかかっている見えない。残念ね。そうつぶやくと、となりで小さなおっさんが歌を歌いはじめた。悲しげな歌声が空まで届いたのか灰色の雲がじわじわと割れてゆく。月が姿を現した。青白い光がおっさんの横顔を照らし出す。なぜか頬が濡れていた。

テスト

このテストに合格しなければ僕の未来はない。出来る限りの準備をして試験を受けた。あとは結果を待つだけ。残念ながらあなたは不合格です。どこからか乾いた声が降ってきた。頭の中に靄がかかり記憶が薄れてゆく。完全に無になる前に今の気持ちを記しておこうと思う。この赤い壁に。

小さなおっさん

配達の中小さなおっさんを見かけた。「こんにちは」「なんや。郵便屋の兄ちゃんやないか」「また家出ですか」「あほ。ただの散歩やがな」「公園に行くのなら乗せていきますよ」「ほな頼むわ」帰りなら良かったのにな。「なんか言うたか?」「いえ何も」そしたらまた彼女に会える。

好きな食べ物

小さなおっさんが散歩から帰ってきた。「おかえりなさい」「今日も郵便屋の兄ちゃんに会ったよ」「また？ あんまりお仕事の邪魔しちゃだめよ」「配達途中に乘せてもろただけや」「いつかお礼をしないと。好きな食べ物とか訊いておいてね」「プリンや」「それはおっさんでしょ！」

闘牛士

僕はこう見えても闘牛士の生まれ変わりだ。赤い布と剣さえあれば牛なんていちころさ。雨蛙は自慢げに言う。本当かい？ なら見てみたいな。器用な職人揃いの小人たちはすぐに赤い布と剣を用意する。それを受け取った雨蛙は颯爽と岸辺に立った。口笛を吹くと牛蛙が水面に顔を現した。

打ち上げ花火

最後は打ち上げ花火に。それがおじいちゃんの遺言だった。父が導火線に火を着ける。ぱちぱちと爆ぜながら火花が走り、おじいちゃんは背筋をしゃんと伸ばした状態で打ち上げられた。ひゅるひゅるひゅる。ぱん。夜空に大輪の花が咲く。やがて私達の足元にぽとりと入れ歯が落ちてきた。

牛

人類初の宇宙飛行士は窓の外を見て愕然とする。牛が浮かんでいた。地球はホルスタイン種の牛そのものだった。但し色が違う。全身に湛える青き海。斑は即ち緑の陸地だった。無線が鳴る。「ハローハロー。調子はどうだい?」「驚いたよ」「どうした?」「われわれの牛はとても美しい」

執事ロボット

おはようございます。ご主人さま。執事ロボットは恭しく礼をする。すぐに朝食を持って参ります。コーヒーとトーストをトレイにのせて戻るとすでに主の姿は消えていた。執事ロボットはトレイを食卓に置き、古びた映写機を直し始める。もし直らなければ彼は一人きりになってしまう。

君も泳ぎなよ。男が女の手を引く。せっかく海に来てるんだから泳がなきゃもったいないよ。言われるがままに女はつま先をそっと水に浸した。小さな波に打たれて女は崩れはじめる。活字でできた身体なのだから当然だ。慌てて男は海水を両手ですくうが活字は指の隙間からこぼれてゆく。